

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

東方刹那烏 番外集

【作者名】

蓬莱人形

【あらすじ】

東方刹那烏の番外編です
はっちやけてます!!

偶に作者が暴走して書いた話があるかもです!!

アーネンエルベと鳥

マミゾウから試験の内容を伝えられた日。

まだ夕食前だったので、佐渡の島を散歩していた

「あー、冷やし中華食べたい……」

ふと、こんな欲求に駆られた

いつか内容の思い出せない夢を見た後もしばらくこの欲求に駆られ里の定食屋でも無理を言って作ってもらったほどだ。

こうなると恐らく冷やし中華を食べるまでこの欲求は消えない……

といつてもマミゾウに頼むわけにもいけないし……

なんて考えながら歩いていると、道の隅に変な扉を見つけた

建物は古い日本家屋のようなものに扉だけ西洋のものになっている

違和感を感じるその扉には「アーネンエルベ」と英語で書かれていた

「まさか……な……」

扉の向こうは異世界に通じているような気がしながらもこの扉の先に求めているものがある気がして、私は扉を開けた

すると、この時代にはまったく場違いな喫茶店にいた

どこだ此処!?

「アーネンエルベにようこそニヤ」

驚いていると猫が話しかけてきた……って……猫かコイツ……化け猫だろっが……

「初めて見る顔だにゃ、注文は何にするニヤ？」

注文……どつやらこの化け猫……従業員か……

「冷やし……中華で……」

自然とこの言葉が出てきた、今更だが……我ながらどんだけ食いたいたいんだ……

猫に席で座るように言われ目に付いた席に座って待つことにした

結構人がいる、人気何だろうか…何より気になったのは誰も私を見て不思議そうにしていけないことだ…

そんな事を考えていたら猫が冷やし中華を持ってやってきて、「お待たせしましたあ、すいません、こちらの席相席にしても宜しいでしょうか…」

と聞いてきた、相席でも全然平気である事を伝えると、猫が他の客を連れてきた…

「相席か…いやな予感しかししないのだが…」

「でも座れないよりは良いんじゃない？」

和服を着た白髪褐色の青年と

身長140cmほどの少女が話をしながら向かいに座った

「にしても何でまた…あ」

「どうしたのシロウ…あ」

二人は私を見ると目を丸くしている…ってあれ？

この二人…どこかで会ったような…

「君は…いつかの…」

「あー、昔のお金出した人だね…」

…はい？昔のお金？だからあれは私の里では普通に使えるという

…

「あーっ!!」

「えっ!?!」

思い出した、以前どこたか分からない場所において、お腹がくうくう鳴りましたってなって

丁度見つけたところに入ってお金が使えないとか何とかで昼過ぎまで働かされた定食屋の二人だ。何で此处に!?(詳しくは亜莉守さんの作品を参照)

「な…なんであなた達が…」

「…なんで君が居るか分からないが…訳を説明しよう」

10分後

和服の青年…もといシロウの話によると彼女…明乃とある扉を通って此処に着たらしい、此処には一度着ているらしく、場合によっては平行世界の自分にあえるという。

刹那（以下：刹）「成る程ね…」

明乃（以下：明）「ところで君は何で？」

私はシロウと明乃に自分のことを話した、過去から来た妖怪であること、あの日の事は私に取っては夢で見たものだと言つこと、自分の今の状態など

シロウ（以下：シ）「にわかには信じられないな…」

口を開いたのはシロウだった、なにを言っている？平行世界の自分に会えるなら過去の妖怪が現れても可笑しくは無いはずだ。

刹「ところでシロウは…」

シ「気になるか…」

明「僕にはバレてるし、話しちゃえば…」

シ「なんでさ…」

そう言つとシロウはしぶしぶ話し始めた、自分が英霊と言われるものだと言つことなどを…

更に10分後

刹「いや〜食べた食べた。」

話を聞いた後沢山の事を話ながら冷やし中華を食べ終えた

明「刹那君、お金は大丈夫？」

その言葉を聞いて顔から血の気が引いた…

忘れていた…

シ「彼をからかうな、お金なら平気だ…フッフッ」

シロウが言うにはお金は全て共通のものに変化しているらしいし
実際お金を確認したら35000円入っていた(天狗になる前のお金
だった事より変化していることに驚いた)

私は二人に別れを告げ会計を済ませ喫茶店を後にした…

気付くとそこは廃屋の前だった、扉はボロい日本家屋に合ったもの
になっていて、もう喫茶店に入れないことを告げていた。

「シロウに、明乃…か。」

そう呟き私はマミゾウのいる家に向かって歩きだした。

帰りに気づいたが、喫茶店に入ってから時間が殆ど進んでいなかった
たようだ…

喫茶店内では30分ほど過ごしたのにこっちでは10分ほどしか
たっていないかった…

不思議と明日から頑張れる気がした…

刹那と月とメイキュウと

（刹那サイド）

ある日、私は自宅でゆっくりと寝ていると夢の中で何から呼ばている気がした…

声のする方へ進んでみると女の子が暗闇を落ちているのが見えた気がする…

「あの子をそのまま落としては行けない。」

そんな気がして、ならなかった気がつくとその子に遠くから声をかけていた…

（女の子サイド）

果てがない落下。

削げ落とされる自己のイメージ。

視界はおるか、持ち物も、記憶も、全て消えてしまっただろう…

ーつまり此処でゲームオーバー！

けれど、まだ私は諦められなかった…

しかし、通り過ぎる…

最後の希望を通り過ぎる…

この落ち続けるという永遠が続くのなら、もういつそのこと何も考えなければ楽になれる…

その時、誰かが私に声を掛けた…

「そんな所で諦めるのか？」

もういいんだ、諦めなくてもこの永遠は続くのだから…

「この世に永遠なんて存在しない、むしろこの空間は刹那の部類だ…」

確かにそうかもしれない、でも終わらせるキツカケもないこの状態を永遠と呼ばずになんて言うのか…

「キツカケならあるだろう、只呼べばいい。」

一体誰を呼べば良いのだろうか？

アナタを呼ぼうにも名前がワカラナイ

「わかった、わたしの事はア…シン…と呼べ…」

都合の良いところでノイズが入る。

しかし、呼ぶべき名前は解った…

私は全ての希望を込めて名前を呼んだ

「来て!!アサシン!!」

く刹那サイドく

女の子に名前を呼ばれた、名前が少し変な気がしたが自然と彼女を助けに行けた

「サーヴァント、アサシン、君を助けに来た。」

こんな事言っている…口が勝手に動いている。

しかし、次からは自分で言うことが出来た

「所詮此処は泡沫の夢、刹那の時のようにすぐ終わる」

何故そんなことが解るのかと聞かれた、

「なあにこっちは刹那についての専門家みたいなものでね」

「起きろ君は此処で消えて良い人じゃ無い…」

こっつ声をかけた後、周りが光に包まれた

く女の子サイドく

目を覚ますとそこは古い作りの保健室だった、健康管理用NPCの桜が「サーヴァントには上の教室でまってるという。そして、サーヴァントと合流したら、生徒会室に来て欲しいというものだった…」

「待ち合わせの教室」

此処に居るはずだけど…

「やあ…君か…」

あの時の声が私を呼んだ

「どっしてこうなった…と言っよりなんだこの格好は…」

そこにいたのは青いキャスターではなく、謎の黒いサーヴァントだった

「あの…あなたは？」

「君を助けたものだ。と言っより何だこの格好は」That Crow
w「って何だ!!舐めてるのか!?!と言っかどこだ此処!?!」

半袖にジーンズという格好に首に何かを付けられている(恐らくタグ)アサシンは訳が解らないといったように体やら周りを見ている。

まずは説明があるようだ、どこかの英霊みたく記憶に障害が生まれてしまったのかもしれない

でもまずは生徒会室に向かわないと、私はアサシンを落ち着かせる
と生徒会室に向かった。